

# 若手邦楽聴き比べ



- 【開催日】平成30年8月25日（土）  
【会場】豆腐料理「笹乃雪」 4階広間  
【主催】邦楽実演家団体連絡会議  
【助成】アーツカウンシル東京  
(公益財団法人東京都歴史文化財団)



# 清元

## 「神田祭」

《「能色相圖（しめろやれいろのかけごえ）」》

浄瑠璃

清元延清恵  
清元延寿鏡

三味線

清元梅弓  
清元延志佐典

言わずと知れた神田祭は、江戸時代において、華やかな山車の行列が見ものの盛大な催しでした。中でも山車の先頭を歩いて警護する「手古舞」は、祭の花形。そんな手古舞の男と、その女房に焦点を当てた作品です。  
「一歳を…では、隔年開催の祭が、今年に神田祭であることを語ります。  
「神田囃子も勢いよく…のあとの三味線の合方（間奏部）は「四丁目」と呼ばれ、本手と上調子の絡み合いが鮮やかな聴かせどころです。「建引じやのと…江戸っ子らしい意地の張り合いに、半ば呆れながらも惚れ込んでいる女房は、「常から主の…の「クドキ」と呼ばれる部分で、夫への思いを述べます。「投節」と呼ばれる当時の流行歌が挿入され、物語は山場を迎えます。

### 詞章

「一歳を 今日ぞ祭に当り年 警固手古舞華やかに 飾る棧敷の毛氈も 色に出にけり 酒機嫌 神田囃子も勢いよく  
「来ても見よかし 花の江戸へ祭に對の派手模様 牡丹 寒菊 裏菊の 由縁もちようど 花尽しへ祭のなア 派手な若い衆が 勇みに勇み 身なりを揃えて ヤレ離せ ソレ離せ 花山車 手古舞 警固に行列 よんやき へ男伊達じやの ヤレコラサ 達引きじやのと 言うちや私に困らせるへ色の欲ならこつちでも へ常から主の仇な気を 知つていながら女房に なつてみたいの 欲 が出て 神や仏を頼まずに 義理もへちまの皮羽織  
へ森の小鳥 我はまた 尾羽をからすの 羽さえも へなぞとあいつが得手物の ここが木遣りの家の株 へヤアやんれ引け引け

## 三曲

### 「花」（初代米川敏子作曲）

第一部 三橋敏優希  
野口敏翠  
第二部 岡崎敏優

よい声かけてエンヤラサ やつと抱き締め 床の中から 小夜着蒲団を なぐりかけ 何でもこつちを向かしやんせ よういよい よんやな  
良い仲同士の 恋諍いなら 痴話と口説は 何でもかんでも 今夜もせ オ東雲の 明けの鐘ゴンと鳴るので 仲直り済みました よういよい よんやな そよが締めかけ 中綱 えんや エンヤこ れは あれはさのえへ オえんやりよう へげにも上なき獅子王の 万歳千秋限りなく 牡丹は家のものにして お江戸の恵みぞ 有り難き。

### 詞章

蝶うてばたもとに花ぞこぼれける。  
もろきは誰の心なるらん。

初代米川敏子、一九六九年(昭和四四年)作曲の作品で、箏と歌が、それぞれ二部に分かれている二重奏です。歌は与謝野寛(鉄幹)の短歌によるものです。箏、歌、共に、輪唱の部分があります。  
箏の調弦は、楽調子と言う陽音階から始まり、前半途中で半音を含む調子にかわり、独奏後に最初の調子に戻ります。

# 「楓の花」

本手 三橋敏優希  
野口敏翠  
替手 岡崎敏優

京都の松阪春栄が明治三〇年（一八九七年）頃に作曲した箏の明治新曲で、その明治新曲の中でも最も知名度があり、演奏頻度の高い名作です。松阪春栄は「京風手事物」の箏の手付けで有名な八重崎検校の孫弟子にあたり、吉沢検校の「古今組」四曲に手事を入れた事でも知られています。箏のパートが高低二部に分かれて合奏致する手事物形式で、明治新曲らしく従来になかった左手での奏法、ピチカートも取り入れている作品です。歌詞は尾崎実夫作詞、古より桜と紅葉の名所である京都嵐山周辺の初夏の様子を歌っています。

## 詞章

花の名残りも嵐山、梢々の浅緑、松吹く風にはらはらと  
散るは楓の花ならん

# 琵琶

## 「五條橋」

琵琶 大熊阿水

唱歌「牛若丸」のモチーフとなった源義経と弁慶の物語です。時代は凡そ八〇〇年前。終生の契りを結んだ二人の出会い、何やら物騒な様子で幕を開けようとしていました。京の都は鴨川の秋の月が皓々と照らす「五條橋」を舞台に繰り広げられる英雄同士の対決をお楽しみください。

## 詞章

小夜更けて 人かげまれになりし頃 妙なる笛の 調べながるる  
弁慶耳をそば立てて サテこそ小冠者ごさんなれ 今宵こそはと  
黒革の 鎧しつかと引きしめて いつもの薙刀杖とつき 待つや五條  
の橋の上 次第に近くなる笛の 主は薄衣身に纏ひ すつくと立て  
る弁慶を 尻目にかけて揚々と 其の傍へをば過ぎて行く  
弁慶やらじと駈け塞り 如何に小冠者今宵こそ その太刀渡せ渡  
さずば 此の道通す事ならず 目にも見せてくれんずと ハッタ  
と睨んで立つたりけり  
牛若きいてあざ笑い 黄金作りの細太刀に 反りを打たせて云え  
るよう 家重代の此の宝刀 取らせん事は叶うまじ 然程欲しく  
ば取つてみよ  
聞くより弁慶 憎き小姓の言状かな さらばと薙刀取り直し  
風を払つて薙ぎたつる  
あら不思議やな小人の ありつる姿忽ちに 掻き消す如く失せに  
けり 弁慶怒つてここかしこ 小冠者何処ともめしに 橋の擬宝  
珠の上に立ち 扇子をかざして招きけり 扱も不敵の小冠者と  
薙刀柄長におつとのべ 走りかかつて薙ぎたつる  
牛若憶する気色なく 太刀抜きかざし渡り合う 左にはずし右  
にさけ 裾を払えば躍り超え 頭をなげばついくぐり 前に現れ  
後ろにせまり 空に飛び交ふ燕似たり  
流石強気の弁慶も 次第に気力もつかれ来て 不覚や薙刀打ち  
落とされ 呆然として立つたりけり  
不思議や御身は誰人ぞ 御名を名乗らせ候へと 問われて小人  
我は源氏の牛若よ  
聞くより弁慶とびしきり さては源家の御曹司にておはせしか 我  
は武蔵坊弁慶なり 粗忽の段はゆるされよ 是より主君と恃まん  
と ここに主従の約を結び 薄衣被かせ奉り  
牛若丸に従いて 月皓々と冴へ渡る 五條の橋を渡りゆく

# 新内

## 「明烏夢泡雪—雪責め—」

浄瑠璃 鶴賀伊勢吉  
三味線 鶴賀伊勢一郎  
上調子 鶴賀伊勢幸

新内節は二八〇年頃前に確立された豊後節系といわれる江戸の浄瑠璃で初代鶴賀若狭掾を始祖として継承されてきました。鶴賀若狭掾は歌舞伎から離れ座敷浄瑠璃、素浄瑠璃として他の芸能とは提携せずに発展し、多くの作品を残しました。天才シンガーソングライターです。

その若狭掾門下から盲人の鶴賀新内が現れます。彼の鼻に抜ける美声の新内に人気を得て大当たりし、その為いつの間にか鶴賀節から新内節と言われるようになりました。現在の鶴賀若狭掾は第十一代目となります。こうして誕生した新内節は、素語りの自由な語り物としてもつばら遊里を中心に定着し、いっそう官能的、情緒的な語り口となり、庶民から愛される身近な音楽となったのです。今日に伝わる新内はさらに洗練されて高低の旋律が変化に富み、そして語り口は嫺嫺として哀調切々と繊細にまた大胆に聞く人の心に訴えます。また新内の三味線は、本手と上調子の二挺の三味線が織り成す繊細で優雅で微妙な音色が特徴的で、特に高音の上調子は独特の発達を遂げました。本日の演目、「明烏夢泡雪（あけがらすゆきのあわゆき）」は初代鶴賀若狭掾の作で、「部屋」と「雪責め」の上下の巻からなる新内節の三大名曲といわれており、江戸時代に起こった武士と吉原の遊女の心中事件を題材としています。

### 詞章

きびしけれ

浦「チー、お情けあるお言葉なれど、是ばツかりはどうも忘れぬ、お許しなされて下さんせ、まだ此上にどのような 悲しい苦しい責め苦でも 私やいといはせぬ どうなつても思いきられぬ いっそ添われぬものならば 一緒に死にたい時次郎さん 殺してくだんせ チイ私ヤ 死にたいわいノウ」

昨日の花は 今日夢 今わが身につまされて 義理という字は是非もなや 勤めする身の俣ならず

浦「コレみどり さぞそなたは悲しかろ 私が憎かる堪えてたも悪い女郎に使われて 思わぬ苦しみ堪忍しや 今宵に限り此の雪は 何の報いぞ オ、寒かろう 可哀やのう」

禿「イエイエ 私は寒うはござりませぬが 次郎さんはあのようにならぬわいノウ」  
浦「オ、よう云うてたもつた、オ、オ、よう云うてたもつた、そなたまでさえ そのように 主を思うてたもつた、わしが心を推量しや たとえこの身は泡雪と 共に消ゆるも厭わぬが」

この世の名残り今一度

逢いたい見たいとしゃくり上げ狂気の如く心も乱れ 涙の雨に雪とけて 前後正体なかりけり

男は兼て用意の一ト腰 口にくわえて身を固め 忍び忍んで屋根伝い それと見るより悲しさの伝えてたわむ松ヶ枝も 今宵一ト夜の掛け橋と 足もそぞろに 定めなき 難なく下へおり立つて二人が縄を切りほごき

時「コレ浦里 こゝで死ぬるもやすけれど 逃る、だけは落ちてみん つい此の塀を越すばかり 幸いこれなる松の枝、伝うて行かん」

諸共と 互いに手早く身持え みどりも共にと取り継る 可哀や此の子は何とせん オ、心得たりとみどりを小脇に引つ抱え 甲斐々々しくも時次郎松の小枝を浦里に確つかと持たせ あたりを見廻し忍び返しを引っぱらず 梯子となして差しおろし ようよう三人塀の上 下りんと思えど女の身 浦里は胸を据え 死ぬると覚悟極めし身の上 何か厭わんサア一緒と 手を取り組んで一足飛び 実に尤もと領きて 互いに目を閉じ一ト思い ちらりと飛ぶかと見し夢は覚めて 跡なく明烏後の噂や残るらん

### 邦楽実演家団体連絡会議

- 一般社団法人義太夫協会
- 清元協会
- 一般財団法人古曲会
- 新内協会
- 特定非営利活動法人筑前琵琶連合会
- 常磐津協会
- 一般社団法人長唄協会
- 一般社団法人日本小唄連盟
- 公益社団法人日本三曲協会
- 公益社団法人日本三曲協会
- 日本琵琶協会
- 一般社団法人大阪三曲協会
- 一般社団法人関西常磐津協会
- 公益社団法人当道音楽会
- 名古屋邦楽協会